

にいがた

北から南から



反(タン)でかネシ

吉田 武雄

昭和天皇が、羽越線加治駅近くの田を訪れて稲刈り中の人に尋ねた。この辺りはどのくらいお米がとれるかという質問だった。佐藤さんは鎌の手を停め「タンでかネシ」と反問した。裕仁さんは、「あ、そう」と返して終わった。

シナリオを作った人の予想外の出来事なのか、事前の打ち合わせがなかったのか不明だが現人神から人間天皇になって間もない方には、米の収量を聞くときは、一反歩(三百坪)につき七俵(約四二〇kg)とかいいうのが、常識という知識がなかったと思う。

そのうえ方言丸出しのアクセントで、ネシという耳慣れない語尾を聞かされては、意味が取れなくて「あ、そう」で済ますしかなかっ

たのだろう。一九四七(昭和22)年十月九日のことで対話は成立しなかった。

先日、「母と暮らせば」を観劇した。富田靖子の熱演もさることながら、その息子を演じた松本光平の演技に感動した。とりわけ、おにぎりを握るシーンは印象的だった。

舞台は、一九四八年秋に設定され、お米の配給が途絶えて、ご飯がないのにかつて母が握ってくれた、おにぎりを懐かしみながら握る、迫真の演技だった。因みに四七年五月までは配給米は成人一人につき一日二合一勺(二八〇グラム)、ほんの一握りであった。

長崎は、原爆投下後四回目の秋を迎えてもお米がなかったのだろうか。若い人には想像もつかないだろうが、その頃は銀シャリと言ってお米は貴重品だった。あの信じがたい「旧優生保護法」が戦後の国会を通過したのも食糧不足に対処するという理由が大義名分だったという。

NHK 朝ドラの「まんぷく」にも着物を食べ物に交換してもらおう場面が何回かあった。



その頃わたしは「小さな学校が消えた」で名が知られた干溝の隣集落の上原に暮らしていた。長岡空襲で焼け出されて、母の実家の農家に居候（いそうろう）していた。

敗戦の年は冷害と肥料や人手不足のせいで、秋の収穫は予想外に悪かった。叔父は、「これでは七俵どころか六俵にもならないぞ」と脱穀しながら怒っていた。町育ちのわたしには何を憤きどっているのかさっぱりわからず戸惑っていた。

昭和天皇が、いわゆる人間宣言をしたという敗戦翌年になっても食糧危機はさらに深刻になった。小出町いちばんの商家と目された奥さんが、お米を分けてと、訪ねてきた。きれいな顔や上品な身のこなしにうっとりした。冷害が米不足をもたらしたのは、戦後直後だけではない。わずか二五年前、外米を輸入して急場をしのいだ。研究所の会員懇談会に八木所長と糸魚川まで行き会員の家に一泊させてもらった。その帰途、食堂で食べたご飯がばさばさして実に不味い、輸入外米だった。

TPP（環太平洋連携協定）が年末から動きだすという。米づくりに頼ってきた越後平野は大丈夫だろうか。今後は美味しい外米がどっと入ってくるかもしれない。雨の多い本県は、田んぼに水が不要になったらさらに水害が多発しかねない。

加治川村は新発田市に合併して一三年になる。その広い農地のすぐ隣の田で、機械を使って稲刈りをした。紫雲寺の農家の友人の厚意に甘えてやらせてもらった。ほんの少しの手ほどきで、難なく刈ることが出来た。

手で刈るときは、鎌の持ち方、力の入れ方、脱穀の時にわらがとびぬけないように稲束を作る技術がある。地に干すには稲束が、倒れないようにする技である。上原の乾田ではおもに地干しで、はさ木に掛けるのはわずかったから人手が随分かかった。

農繁期には学校は休みになった。小学生でも苗運びや刈った稲運びなど大事な労力になった。その代わり農閑期は、農耕馬に乗ったり、雪が固まった頃に、かんじきを履いて兎追ひ

にいがた

北から南から



をしたが、狩れるものではなかった。

政府は、教員の過重労働を解消する手段に夏休みを利用するようだ。繁忙期には八時間労働でなくともいいが、夏休みにその代わりを与えるという理屈だ。仕事量が多い割に教員が少ないのが超過勤務の原因なのに。

子育ては、動植物の育成と本質的には同じだろう。農的生活は、暑いときは日影を作つてやり、寒いときは覆いをするなど手立てを取るのが当然である。一九六一年の夏休みに私は給与をもらいに一日だけ登校し、他は自主研修と休養にあてた。

夏休みは、教員の自主的な研修のためにあるのが、事実としても歴史的にも本質としたのは、「チコちゃんに叱られる」(NHKテレビ)であり、注目された。文科省はその問い合わせにはいつ何のために学校の夏休みが制定されたかは不明だと答えた。

教員数が今の学校に相応しいのか、それこそ国民的議論が必要なときであろう。議論どころかまともな対話さえ成立していない国会

を見ると、民主主義の学校は地方自治からという言葉が想起される。幸い新発田市長選があり、無投票の三条の友人からは羨望された。市長選は、三期目を目指した現職が、公明党の推薦を得て二六、二九二票、四二歳の前市議が一七、四〇〇票だった。革新統一候補にはならなかったが、余所者批判に負けず、城下町新発田に新風を吹かせた。

八年前に現職の選挙責任者を務めた保守の〇さんが、新人に期待して決起集会を大いに盛り上げた。〇さんは、三七歳から市議を続け議長を二回も務めた自他ともに許す大物で、拓殖大建学の精神で市政に関わってきたと、マイク片手に演壇などかまわずに、あちこち歩きながら生々しい市政のエピソードを語り、現職(拓大中退)の厳しい批判を繰り出した。まさに対話的な演説で講談や落語のような面白さがあった。集まった人達の多くは、保守の地元政治家の語りを初めて聞いて感心した。わたくしもその一人である。

(所員)